

リトアニアに来て1年2ヶ月、この間、毎月毎週のように歴史に触れる機会をいただきました。

リトアニアでは、大統領や国会議長、首相等の国のトップが先頭に立って行われる歴史的な国家行事が沢山あります。例えば、1252年の7月6日の建国の日、1918年2月16日の国家復活の日、1990年3月11日の独立回復の日などの記念日には厳かな国家行事が営まれ、自由や独立を獲得したマイルストーンを毎年再確認する大切な取り組みとなっています。そしてそのような自由や独立のために犠牲になった人たちへの追悼式も沢山あります。例えば、1990年の独立宣言の翌年、ソ連軍の首都ヴィリニウス侵攻により犠牲となった方々、或いは国境でソ連兵に虐殺された犠牲者の方々、またソ連によるシベリア追放の犠牲者の方々、ナチスドイツ占領下のリトアニアで発生したホロコーストの犠牲者の方々、その方々を毎年その remembrance day に追悼し、尊い犠牲を決して忘れないという決意も新たにします。

もちろん、ロシアによるウクライナ侵攻という暴挙が起きて以降、このような国家行事の中でウクライナ戦争での犠牲者も追悼されたりしますし、ウクライナの独立記念日もリトアニアに避難しているウクライナの方々と共に8月24日に粛々と行われました。

またリトアニアでは、毎年9月1日が学校の新学期スタート日で、この日を大切な「Science & Knowledge Day」として全国の学校で儀式が行われます。今年、私はミコラス・ロメリス大学に招待されて儀式に参列しましたが、学長や来賓のスピーチでは、教育・学びの目的は自由と平和である、と何度も強調されていたことがとても印象的でした。

まさに自由と平和の重みを知る国、自由を失うことの代償の計り知れない大きさを知る国ならではの、国家主導行事の風景です。

さてそのような歴史を大切にするリトアニアは、2020年を、杉原千畝の生誕120周年、命のビザ80周年ということで、この年を「杉原千畝イヤー」とすることを国会、セイマス、で決議しました。

杉原千畝は、1939年、ナチスドイツによるポーランド侵攻の直前、また日本が真珠湾攻撃で対米英全面戦争に突入する2年前にこのリトアニアに来て、わずか1年ですが当時の首都カウナスに副領事として滞在しました。杉原千畝は、ここで人間としての正義を行う勇気を発揮しました。当時の日本の国家としての大義やその判断・行動に左右されずに、淡々と人間としての正義を貫く勇気を発揮しました。結果、数千人規模のユダヤ人が、自由と命を失わずに済んだという日本人として誇るべき歴史の一コマです。しかしながら一方で、日本という国家にとっての20世紀前半は、欧米列強と対峙する中で、他国に進出し、結果人間としての不正義を働いてしまった時期であったこともまた事実です。そして、私たちは、そのような事実をきちっと再認識し、世代を超えて語り継いで行かなければならない、ということ、歴史を大切にするリトアニアに来て改めて痛切に感じるようになりました。

日本は、明治以降、国家神道という宗教まで新設して国民国家形成と富国強兵への道を邁進しましたが、結果は進出した他国だけでなく自国の中でも自由を大幅に制限し、自国他国に膨大な犠牲を強いて大失敗し、そして敗戦で独立も失いました。その歴史を、私は、杉原千畝を振り返る中で再認識したいと強く感じるようになりました。

自由とは、端的には権力批判の自由です。その自由を剥奪され、権力に逆らう者は疑いだけで証拠なしで逮捕され、裁判なしでシベリア送りや死刑になる、というのが、リトアニアが第二次大戦後に経験した自由の喪失です。

言い換えれば、自由とは、自分を含む組織や社会や国家の中で不正義を見つけたときに、それを正義に直すという勇気を発揮するための自由であるということだと思います。アリストテレスの昔から自由人に求められた最高の徳でもある勇気、また孔子の「論語」に言う「義を見てせざるは勇なきなり」の義を実現させるための勇気、それを発揮することが、自由と平和を可能にするということだと思います。ベラルーシではそういう勇気のある人たちが沢山逮捕され収監されています。私たち日本人も、歴史を振り返りつつ、自由とは正義への勇気を発揮することである、ということ肝に銘じていきたいものです。

さて私がリトアニアに来て間もないころ、ある政治家の方から「The History of Lithuania」という、リトアニア外務省により広範な読者層のために2013年に編纂された歴史本の英訳を紹介されました。その前書きには、この歴史本の編纂理由として“A nation’s future is contingent upon its memory”とあり、それを典型的に示す言葉として、リトアニアの教育者がポーランドの歴史作家へ1859年に送った手紙の中のフレーズが引用されていました。それは、“A nation’s history must be on every citizen’s lips, and then the nation will be immortal.”です。これが、杉原千畝を尊重してやまないリトアニアという国から、私が学んでいることのエッセンスです。

今年、日本リトアニアの友好100周年に、杉原千畝を今一度見つめ直すにあたり、特に次世代を担う皆さん若い世代の方々と一緒に、日本の歴史を正面から語り合い、自由と平和の尊さと重さとその維持の難しさを再認識したいと思っています。そして、ウクライナが戦っているのは、Ukrainian Soilで行われている戦争ですが、自由と民主主義世界を守る戦争であるという歴史認識も同時に再確認し、ウクライナの方々への最大限の支援を、今一度肝に銘じていきたいと思っています。

最後に、皆さんご存じの通り10月末にシモニーテ首相が訪日されましたが、首相が訪日直前にあるオンライン・インタビューでおっしゃっていたことをご紹介します。ロシアには、ソ連の国内国外に膨大な犠牲を強いたスターリニズムという歴史がありますが、そのような歴史を含めて、「ロシアはその過去を再検討する義務を自らに課していない国」であり、この戦争が終った際に、対敗戦国ロシアへの何らかの再興パッケージプランが提示さ

れる場合には、「ロシアという国家への条件 condition として彼らの過去の合理的な再検討 rational rethinking を課さなければならない、でなければしばらくしてまた同じようなロシアが出現する。これまでのロシアの数百年の歴史がそうであったように」。